

## 中国の自然災害の歴史と自然・環境破壊の現状

中国にはかつて、「社会主義国に環境問題は存在しない」というスローガンがあった。しかし、現実とは正反対に、1970年頃、主要水系の汚染などをはじめとする環境問題がかなり深刻化していた。中国政府が環境問題の存在を認識し、環境保護への取り組みをはじめたきっかけは、71年にスウェーデンで開催された第1回国連環境会議であった。この大会に大型代表団を送った中国は、73年に1回目の全国環境保護大会を開き、国内の環境汚染と生態系破壊の深刻さを明らかにし、今後の対策などについて、組織と制度の両面で基本的な方針を打ち出した。すでに96年の第4回大会まで開いている。

1989年以来、中国は「環境保護法」に基づき、毎年6月に前年度の環境状況を公報の形で発表している。毎年「環境状況公報」は次のように述べている。「都市部を中心に環境汚染が依然として進行しており、また農村部に広がりつつある。生態系破壊の範囲も拡大している。これは今や、毎年公報に登場する常套句になっている。中国政府自身、大気汚染、水環境汚染などの環境汚染の深刻化と対策の遅れを率直に認めているのである。

一方、1998年、中国は歴史的な大洪水に見舞われ、被害は長江、松花江からチベットのヤルツァンポ河流域にまでおよんでいる。98年8月末現在で被災者は2億2千万人以上、公表されている死者は3千人以上といわれている。しかし、特に武漢市近郊の村落では「死者2万人」説もあり、だれも3千人説を信じる人はいない。さらに倒壊家屋は五百万戸といわれている。直接的な経済的損失は約3兆円、最終的には国内総生産（GNP）の3～4%に達しようとしている。それは98年の中央政府予算の29%にあたり、今年の経済成長率は目標の8%より低い7・5%以下にとどまるとの観測も強くなっている。

### 歴史にみる水害・干ばつ

次に中国の自然災害や自然・環境破壊の歴史をふりかえりつつ、現在をみてみよう。

文革初期に犠牲になった郭拓氏の『中国救荒史』によれば、

「中国の天災は、中国歴史の歩みとともに回数が増え、周期が早くなり、そして中国人の勢力拡大、中華文明の波及とともに、局地的なものから広域的なものへと拡大している」と述べている。

中国2千年の自然災害の歴史をみると、秦・漢の約400年間、中国の天災は文明誕生の



地、黄河流域に多発していたが、漢民族勢力の南下と文明の南下とともに隋・唐以降には、天災もまた黄河・淮河から長江流域に広がり、明・清の時代に広東省の珠江流域にまで広がって全国的になった。頻度も秦・漢時代には約 26 年に 1 回の災害、三国時代は 7 年に 1 回となり、宋の時代には 1 年に 1 回となった。これが近世の元、明、清になると半年に 1 回となり、解放後では「雨が降ればすぐに水害が起こる」ようになった。これは、社会主義建設の名による乱開発によって、中国の山河が環境・自然保護政策の未成熟のままに建設・開発されていったことが原因である。

北京留学中の 65 年頃、北京郊外の十三陵ダム建設に短期間参加したことがある私でさえ、このことは実感できることなのである。そのときのダム建設工事は、基本的にシャベルとスコップとモッコと手押し車で的人力作業であった。毛沢東の「愚公移山」(愚公山を移すという寓話。むかし、愚公という男が村づくりをしようとしたが、山があつてできない。そこで 1 人で山の土を掘って移動し、山を掘り崩して街をつくったというおはなし)の精神の発揚と、いわゆる毛沢東思想の“活学活用”の絶好の学習体験の馬だったのである。

すでに 80 年、水利省は政府にたいして「長江中下流域の今後 10 年間における洪水防止対策に関する報告書」を提出し、結果的に 110 億円の予算が必要であると提起したが、わずかな予算しかつけられず、実際には対応が立ち遅れていたことがあきらかになった(98 年 9 月 8 日付各紙)。110 億元を惜しんで 2 千億元を失ったのである。

歴史の教訓から学ぼうとしないと、自然から痛いシッペ返しをくらうのである。

#### 「政策」と「対策」による森林破壊

解放後、中国の社会主義建設は「大躍進」や「大塞に学ぶ運動」などで「地山治水」のために全国民が総動員された。森林が伐採され、湖沼が埋められ、河川はダムで堰き止められ、大地の方々が掘り返され、環境・自然破壊は急速にすすんだ。各地に 8 万以上のダムが建設されたが、そのほとんどが 30 年も維持できずに砂ダムと化した。「大躍進」時代に作られたものの、そのうちの 80% のダムが漏水して、すでにダムとして機能しなくなっているのである。

中国の森林の衛星写真からの実測では、森林の分布が偏っている。東北の大興安嶺には中国の半分以上の森林が残り、あとの 30% が少数民族の住んでいる雲貴高原と四川省の奥地となっている。漢民族の住んでいるところは、ほとんど森林が消えているか、極端に少なくなっている。建国初期、森林面積が 82% あった東北地方の長白山地は 14% にまで減っており、中国の木材生産量の半分以上を占める黒竜江省も森林喪失の危機にある。もちろん、政府も森林伐採の規制措置を打っているが、なんら効果はない。

中国政府がいくら積極的に植林運動を展開しても、「政府に『政策』があるように、農民には農民の『対策』がある」とばかりに、昼は植林をして夜は「盗伐」という状況が横行しているのが現状である。中国は農民のエネルギー問題の根本を解決しない限り、今後も森林の消失は続くであろう。

98 年 9 月 6 日付の朝日新聞によると、「国民の 3 分の 1 が住む長江流域は、雨水をためる森林が 30 年間に半減し、全面積のわずか 10%、土壌の流失は日本の面積の 2 つ分にあ

たる 74 万平方キロで、30 年前の二倍に拡大した。少なく見積もって年 24 億トンの土壌が流れ出し、長江の流れは黄色く濁り、『第 2 の黄河』になった。現在のペースで土壌流出が続けば、300 年後には長江流域の全域がハゲ山になる。60 万平方キロを緑化すれば、500 億～1 千億立方メートルの貯水能力が生まれる。ただし、150 億元が必要だ」と解説している。

中国の森林の急速な消失は、木材不足のほかに農村のエネルギー資源不足が最大の原因の一つといわれる。辺境の地は別にして、農民がいくら作物の茎や穀、干草、獣糞などをエネルギー資源として利用しても、その半数の農家がエネルギー不足に悩み、北方では越冬さえも厳しい状況である。今回の洪水被害が激しかった黒竜江省は、9 月半ばには北部で霜が降りる。家を失った 216 万人の越冬対策は、「3 分の 1 は友人か親類の家に身を寄せ、3 分の 1 は家を補修・新築する。残りは、綿のシーツでつくったテントのなかで寒さに耐えるしかない（馬淑潔副省長）」というが、1 月には零下 30 度以下に冷え込む（同朝日新聞）という状況である。

98 年 8 月 31 日付の新聞「赤旗」は次のように報道している。

「21 日、中国国家林業局の李青才副局長は、ことしの水害をもたらした『根本的原因の一つ』に大河川の源流、上流における天然林破壊があることを認め、長江、黄河流域の天然林伐採を全面的に停止すると発表し、『閉鎖林を造成し、耕地を林に戻す活動を強化する』ことを明らかにした。これにたいして『南方周末』紙 21 日付は、読者の意見として『客観的条件だけを述べて、主観的過失を語らず、責任を天に押しつける。こうした国家と国民にたいしてきわめて無責任な作風が、近年、洪水被害の頻発を招いている重要な原因だ』と述べている。これは某防災指揮部事務室主任の発言である。」

これらのやりとりから、98 年の大洪水の真因が、果たして大雨だけによるものなのか、それとも政策の失敗からくる人災なのか、自ずと明らかになってくるのではないだろうか

「山河敗れて国あり」

森林消失から生まれた表土の流失は全土地面積の 16・7% である（88 年当時）。長江も第 2 の黄河となりつつある。さらに水資源の喪失がある。中国最大の洞庭湖は土地の推積で、58 年当時の 40% 以上も湖水面積が減り、それに代わって播陽湖が最大となった（香港「大公報」95 年 7 月 23 日）。その播陽湖も 30 年間で半分以上が干拓され、大量の土砂の流入がある。「千湖の省」といわれる湖北省では、建国当初、1400 あった湖沼が 800 にまで減少している。長江流域も 1060 が 80 年代には 300 に減っている。

中国の大地には多くの河川が流れている。そのなかで、長江は中国最大の河で、長さ 6300 キロ、流域面積 180 万平方キロで、日本の国土面積の五倍に近い。黄河は第 2 の大河で長さ 5400 キロあまり、流域面積は 75 万平方キロである。黄河流域も長江流域も中華文明発祥の地である。しかし、長江中下流の湖沼も面積は開拓によって 50 年代の約半分になっている。洞庭湖、播陽湖、江漢平原（湖北省）と雲南高原の湖沼を合わせた貯水能力は、350 億立方メートル分が消失した。これは湖北省宜昌県に建設中の三峡ダムに相当するといわれる（朝日新聞 98 年 9 月 6 日付）。

各紙の報道の直前、98 年 7 月 12 日付読売新聞は総括的に次のように述べている。「中国では建国後の急速な人口増加に伴って、耕地造成などのため、森林地帯の乱開発が進行。

河川流域の保水力が大きく後退した。また、湖北、湖南など長江中下流域五省で過去 40 年間に、1 万 2 千平方キロもの湖沼が埋め立てられて大小約 100 の湖沼が消失、流域の貯水能力が著しく低下した。こうした長年の環境破壊が近年の洪水被害をより深刻化させている可能性は否定できず、洪水防止対策の困難さに拍車をかけている。」

まさに「山河敗れて国あり」の状況である。

#### 漢民族の草原への侵入が自然生態系を破壊している

20 世紀はじめ、東北地方への「満州」大量移民があった。1949 年の新中国建国後、漢民族が長城を越えて漠北と新疆への大量移民をはじめて以後、59～61 年には全土が自然災害に遭い、内モンゴルへは 192 万人が移民し、47 年の 569 万人の人口が 90 年には 2145 万人に増えたのである。漢民族による草原への急速な侵入と過剰開発によって自然の生態系は激変し、草原が急速に退化していった。

中国の利用可能な草原は 34 億畝（3400 万ヘクタール）だが、退化現象が急速に進み、80 年代中期には、すでに 30%以上が退化していた。退化面積は 13 億畝に達し、目下、毎年平均約 2 千万畝以上のスピードで拡大している。原因は、大量移民で急増した人口をまかなうために、草原を畑地へと転用して穀物を栽培したからである。また、過剰放牧による牧草の激減、水資源の過度の利用など、地上と地下の資源を開発し続けたことも砂漠化を拡大させた大きな原因でもある。さらに、薬草や鉱産物の掘削などで、つねに数十万人にのぼる人間が各地から草原に踏み入ってきた。そのために草原の生態系が破壊され、そこに棲む肉食野生動物のほとんどが絶滅しつつある。さらに、ネズミ類の過剰繁殖でペストが猛威をふるい、家畜まで大きな脅威にさらされている。

98 年 8 月、シルクロード旅行中に私が見た中国のテレビは、各地の人民解放軍部隊が洪水と英雄的に闘う姿とともに、全国各地で義捐金を募金箱に入れる状況が映し出されていた。被災地の住民は零下 20 度から 30 度にもなる寒さに向かい、早急な援助が必要であるが、テレビに映されるのはほとんど 100 元紙幣をカメラの前に高々と掲げて募金箱に入れる状況である。大多数が 1000 元前後の給料の中国の勤労者にとって、被災地の住民を助けるとはいえ、金額を選択する自由はほとんどない。さらに工場や機関などの各単位の人数と募金参加人数の比率や募金総額がテレビに映し出される。幹部にとっては、発表される数字が自分の成績となり、昇進・出世にもかかわる重大事になってしまう。反面、当時の中国のマスコミでは、洪水被害の原因の追及や根本的対策などの報道がほとんど皆無であった。98 年 9 月 6 日、江沢民国家主席は「洪水との闘争での勝利」を宣言したが、勝利したのは“天安門事件で市民を大量殺戮した人民解放軍のイメージチェンジ作戦”だけであるというのは、果たして皮相な見方だろうか。（ここまで 98 年 10 月 日中友好新聞掲載）

#### 地球環境問題に決定的な影響をおよぼす中国政府の施策

中国政府はあらゆる環境問題に苦しんでいる。結論的にいえば、建国以降のエネルギー政策の不十分さを原因として、その後の、改革開放約 20 年の高度経済成長の陰で、大気汚染・水質汚濁・土壌劣化などが進行している。酸性雨（中国語で「空中鬼」）の影響は日本

にも及んでいる。さらに、エネルギー消費量が膨張し、二酸化酸素（CO<sub>2</sub>）など温暖化ガスの排出増により、公害が加速度的に増えている。

中国は高度経済成長の反面、1992年に1次エネルギーの消費量が国内生産量を1700万トン上まわり、その年から「第1次エネルギー不足国」になってしまった。石炭の生産量も90年に入ってから増産が鈍りつつある。エネルギーの75%は石炭に依存し、その石炭の質もよくない。93年からはすでに石油の純輸入国に転落した。新疆には膨大な石油資源があるにもかかわらず、中央政府は沿海地方の開発に重点をおいているために、パイプラインの建設を許可しない。しかし、あまりの格差の広がりや矛盾をかかえた政府は、ついに「西部大開発」の号令をかけた。

中国の大気、土壌、水資源の汚染は、どれをとっても世界に大きな影響を与える。酸性雨の原因でもある硫酸化物の年間排出量は2300万トンを超えた。日本のほぼ30倍である。現状でさえもこの通りである。

14億人の近代化に必要なエネルギー資源問題は、中国の現有資源の不足問題だけではない。中国を主な原因とした地球全体に影響をおよぼす温暖化対策という視野からみても、中国の近代化と抜本的な公害・環境対策には人類の英知の結集が望まれるのである。

一方、地方自治体の環境研究機関でつくる「全国公害研究協議会」は、冬期に日本海側の各地に酸性雨や酸性雪をもたらす酸性物質が、中国や朝鮮半島を運ばれてくるのが2000年7月23日までに確認された。逆に、夏季の酸性雨は日本国内の汚染源の影響を強く受けていた、との報道が同日の信濃毎日新聞夕刊に掲載された。

同紙は続いて、雨や雪を強酸性にする硫酸イオンが1～2月に特に高濃度だったのは、新潟や金沢、福井、鳥取、松江など日本海側が中心。ほとんどが中国大陸から渤海を通過、朝鮮半島や黄海を運ばれてきており、風上に当たる中国や韓国での硫酸化物などの排出が原因で酸性度が高まることが分かった。

6月に硫酸イオンが高かったのは八戸や前橋、高知など。3日前までの移動経路をたどると、大陸との越境移動はあまりなく、国内の都市部などの汚染源が強く影響していた、とある。

2000年夏も中国は旱魃、洪水や地滑りに悩まされている。中国政府の洪水対策部門の当局者は、雨期入り後、洪水や地滑りにより全国で少なくとも400人が死亡したことを明らかにした。

中国では5月以降、南部のほか長江や黄河の流域で洪水などによる被害が出ている。本格的な洪水シーズンに入る7月下旬を前に、各地では被害予防対策に力を入れ始めている。